＜ 編 集 後 記 ＞

今年，最後のセンターニュースをお届けします。今号も多分野に亘る内容の読み応えのあるニュースとなりました。多忙の中ご執筆いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。ところで，今年の2月号から，“閲読”と称して編集委員が手分けして，集まった記事に目を通す作業をしています。広辞苑には，閲読とは内容をしらべながら読むこと，校閲とはしらべみること，文書・原稿などに目をとおして正誤・適否を確かめることとあります。各編集委員が担当する記事は必ずしも編集委員の専門分野とは限りませんが，場合によっては校閲に近いニュアンスになることもあります。当編集委員会では，“閲読”は，読みやすいより良いセンターニュースをお届けするための編集作業の一環と捉えています。ご協力よろしくお願いします。

薄田泣菫の随筆（冨山房百科文庫）に「ぼんつく蓼」と題する一文がある。広辞苑によると，“ぼんつく”は，「まぬけ」とか「ぼんやり」で，“蓼”は，「特有の辛みを有し，幼苗を刺身のつまなどにして食用」とある。話は，作者の家の畑に自生した蓼のこと。その蓼は，辛味が利かない。人に聞くと“ぼんつく蓼”という。（以下，『』内は随筆から引用）。

『「うちにはぼんつくは要らないから，引っこぬいてやりましょうか」

「いや，抜かなくともよい。ぼんつくの一本ぐらいあったっていい」』

秋になって花が咲き，実が残った。

『…しなしなと風に揺れ，風に縺れる姿が何ともいえず美しかった。私たちはそれを見るたびに心より慰められた。皆は口々にいった。

「ぼんつくさん。なかなかぼんつくじゃないのね」』

余裕のない今の日本の社会では，ぼんつく蓼は，根こそぎ抜かれてしまっていることでしょう。せめて，教育の場では，抜かないことを願って……

（T.T.）